

【民間教育運動】

生活教育の理論（考え方）を学んでいておもしろい点は、子どものことの議論が、大人や教師の生活といった自分たちの問題にすぐ応用できることです。四月号での「衝動↓〈興味⇨目的〉↓職分」をひとつながりのものとして見る見方は、教師にも言えるのです。

教師が職業人としてどう活動するかは、各自の興味に支えられ、それを衝動が奥底でかき立てています。子どもが「これやりたい！」と言ったとき、まだ社会的意味（指導計画）や自分の興味から説明できなくても、「やってみようか」、「応えなくてはい！」と思う時があります。子どもと一緒に展開した活動の意味がずつと後になつてからわかつてくることもあるのです。

ですから、教師は、社会的責任を果たすためにこそ、自分で考え、決断し、実践し議論しあう自由が空気のように必要です。制度的な研修やその改善も重要ですが、教師には自主的に実践を交流し考えあう仲間が必要です。そういう仲間が集まったいろいろな団体があります。職分である専門性も学びますが、それが「好

生活教育 キーワード

きだ」「楽しい」と思う「衝動」も仲間を集めます。

日生連は民間教育団体の老舗です。一番の特徴は、その興味の多様性、多様な興味のつながりです。どの年齢でもどの教科でも、どの分野でも、多角的に議論ができます。寝ている子をどうするか。起すだけでなくいろいろなかわりを考えられます。一時期、大学の研究者中心の団体が、他の団体を「分野別」に組織するよ

うな動きもありましたが、日生連は自分のなかにいろいろなものを総合的に育んできました。

時に行政（文部科学省、教育委員会）の行き過ぎた管理的な面に反対することもあります。しかし基本的には、日本国憲法という夢を実現する仲間どうしのはずです。昨年の中央教育審議会も、教師の力をほんとうに高める意味で、民間教育運動を奨励しています。この八月の日生連夏の埼玉研究会も、教育委員会の後援があります。自主的な「研修」で参加することもできます。

（研究部・加藤聡一）

文献 海老原治善「地域教育研究サークル運動の昂揚と民間教育運動のあり方について」『カリキュラム』一九五七年四月号。